

# ウクライナ避難民の支援と人類社会の未来像 －多民族共生／ごちゃまぜ型の居場所に係わる考察－

環境学部環境学科 浅川 滋 男

## 《研究概要》

2022年2月24日以降、ロシアによってなされたウクライナ侵攻はあまりにも衝撃的であり、いったい私たちに何ができるか、を考えさせられた。その結果、チャリティ活動等による避難民窓口への寄付とともに、日本に逃れてきた人々の支援の課題を発見し解決することがまずは必要だとの認識に至る。とくに後者については、海外からの避難民の受け入れが多民族共生社会への第一歩になるという期待を込めている。この場合、避難民を単独に扱うのではなく、障害者・高齢者等と健常者・若者・子供らを融和的に交流させる福祉系「ごちゃまぜのまちづくり」が有効な参照モデルとなりうる。また、在日ウクライナ避難民の大半が東京など大都市に集中するなかで、日本海側の過疎地に定着しつつある人々の意識を「田舎暮らし」の観点から捉えることも目標の一つとした。こうした前提の下、以下の活動に取り組んだ。

- 1) 日本海側過疎地に居住する避難民の取材： 昨年6月、4名のロシア人が出雲に逃れてきた。サンクトペテルブルグの日系企業で雇用された4名のうち1名の男性が、モスクワで反戦デモに参加して拘留され、罰則としてウクライナ前線に派兵される可能性が高まったため、日本人CEOが4名を日本に連れ帰り、知人のつてから出雲を居地とし、IT技術を駆使したウクライナ避難民の支援活動を行っている。来日直後に出雲を訪ね、4人のロシア人や支援者と面談した。続く9月には、彦根（キッチンカー経営）、福井（ランゲージ・アカデミー）、石川（日本航空高校石川）のウクライナ避難民を訪ねた。
- 2) ウクライナ避難民の支援に係る講演会： 10月4日、本学サス研究主催の講演会で浅川が「ウクライナ避難民の居場所を読み解く」を講演した。内容は、おもに1)の成果による。
- 3) 龍岩寺ごちゃまぜBOX：「ごちゃまぜのまちづくり」を実践する就労継続支援A型の社会福祉法人「佛子園」（石川県）と、佛子園をモデルにして「生涯活躍のまち」の拠点整備全国展開する青年海外協力協会J O C Aのスタッフを招聘し、岩美町の龍岩寺でシンポジウムを開催した(11月19日)。

- 4) 和洋折衷・新旧融合型の古民家再生：新潟の限界集落に定住して古民家再生に取り組む旧東ドイツ出身の建築家、カール・ベクス氏の手法にならう新しいスタイルの古民家再生を将来的に実践するため、鳥取市河原町の旧地主住宅T家を実測調査し、分譲型の再生案を提示した。また、新しい古民家再生の在り方を吸収するため、上方往来用瀬、丹波篠山、那覇などを視察した。今後、詳細を詰める。

## 《研究成果》

研究概要の番号にあわせて成果と展望を述べる。

- 1)～2) 出雲のロシア人たちは、田舎は物価や住宅費用が安くて暮らしやすく、ネット上の支援活動にも支障がないとして出雲での生活に肯定的である（鳥取在住のウクライナ人2名も同じ）。日本に逃れてくる日本人は東京以外の日本を知らないの、ドポモガ（dopomoga.jp）という支援サイトでは、地方の良好な仕事や住宅を斡旋中。一方、彦根や北陸では、親類のつてや語学学校・高校のネット上オファーに申請した結果での定着であり、とくに田舎暮らしの指向はなく、将来は大都市での就職に意欲を示した。ネットの情報に接するのはウクライナ都市部の居住者に偏向しがちであり、地方の、とくに農村部に広報が及んでおらず、農民たちが移住避難のための手段や保証人の確保ができない状況とも関係がある。世界有数の農業国ウクライナの農民の多くは、海外への避難ができない状態にあり、かれらにも都市居住者と同じように避難のオファーが出せるようになれば、日本海側の過疎地で農業など第一次産業に従事する移住者が増える可能性がある。
- 3) 佛子園の福祉事業は、障害者等を隔離する旧来の「特養」的介護を否定し、施設の中にジム、プール、食堂、保育園などを設けて障害者と健常者を自由に交流させるものである。それは「支援する側／される側」の二極構造ではなく、両者が入れ替わる双方向の支援である。一方が他方に寄り添うのではなく、双方が寄り合うことで健全な支援が成立する。この方式は、国外からの避難民や移住者にもそのまま応用可能であり、この場合、障害者や避難民の労働（雇用）が交流の鍵を握る。
- 4) T家の再生活用は幕末に遡る土蔵など付属施設に限定し、和洋折衷・新旧融合だけでなく、中国茶館のシノワズリ的フレイバーを備えるものとして提案した。今後、詳細を詰める。

《成果報告書》 浅川（編）『居場所とマイノリティ ブータンとウクライナ、そして過疎社会』ASALAB 報告書第41輯、2023：124p.